

防災対策調査特別委員会 行政視察調査報告書

- 1 視 察 日 2025年7月15日（火）
- 2 視 察 先 ○兵庫県淡路市
北淡震災記念公園・野島断層保存館
○兵庫県神戸市
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
- 3 視 察 者
- | | |
|---------|-----------------|
| 委 員 長 | 小 森 弘 詞 |
| 副 委 員 長 | 義 本 み ど り |
| 委 員 | 荒 木 慎 大 郎 |
| 委 員 | 上 田 伴 子 |
| 委 員 | 芹 澤 正 志 |
| 委 員 | 竹 中 理 |
| 委 員 | 田 中 藤 一 郎 |
| 委 員 | 山 田 貴 久 |
| 当 局 | 畑 中 聖 史（危機管理部長） |
| 議会事務局 | 船 越 初 美 |



野島断層について説明を受ける委員



北淡震災記念公園・震災体験館にて
VRを使用した地震の揺れを体験する委員



人と防災未来センターにて
当時の写真や資料を見学する委員



人と防災未来センター前にて

日 時	2025 年 7 月 15 日（火） 午前 10 時 30 分～午前 11 時 30 分
視 察 先	兵庫県淡路市
調査項目	北淡震災記念公園・野島断層保存館
調査内容	(1) 野島断層保存館 兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の震源域に位置し、活断層「野島断層」を原位置で保存・展示している施設。地表に出現したずれや隆起をそのままの状態で保存し、長さ約 140m にわたり屋内で見学可能。断層構造の立体展示により、活断層が原因の内陸型地震のリアルさを視覚的に学ぶ。 (2) 震災体験館 阪神・淡路大震災および東日本大震災の地震波を再現した「地震体験装置」を設置。震度 7 クラスの揺れを体験し、家具転倒などの危険を体験し、映像やパネルで被害状況や復旧の道のりが学べ、防災の備えの必要性を学ぶ。 (3) メモリアルハウス／神戸の壁 断層直上に建っていた実際の民家を保存。壁や床の損壊など、断層の破壊力を体感できる構造。神戸市内の震災で焼失を防いだ「延焼防止壁（神戸の壁）」も移設・展示され、建築物の被害を学ぶ。
所 感	まず、エントランスには、国道 43 号が倒壊した当時の衝撃的な状況を再現した模型が設置されており、入館者それぞれの記憶を呼び起こすような印象的な導入となっていた。その後の展示では、多数の写真や資料を通じて、当時の被害の様子を辿ることができた。 さらに、実際の地震断層や地表面の変化を目の当たりにすることで、「これほど硬い大地が動くとは」という地震の持つ大きなエネルギーを実感し、地下深くで起こった自然現象を想像することができた。住宅の展示では、建物自体は鉄筋コンクリート造で損壊を免れていたものの、家具が激しく転倒している様子が再現されており、日頃からの家具の固定や配置を考慮することの重要性を学ぶことができた。リアルな展示の後には、揺れ体験によって災害の恐ろしさを身体で体感することができ、極めて実践的かつ教育的価値の高い施設であると感じた。 また、冒頭の職員による説明では、当時の北淡町は人口規模が小さく、住民同士のつながりが密で、「誰がどこで寝ているかを知っている」という関係性があったという。このような中で、300 名が生き埋めになったが、その多くが助け出され、死者は 39 名にとどまったという話があった。現代においてそのような密な近所付き合いは難しい側面もあるが、災害時に助け合えるような“緩やかなつながり”を築き、維持していくことの重要性を痛感した。 なお、施設の来館者数は開館当初 260 万人を超えていたが、近年は 13 万人程度に減少しており、館内の随所に老朽化も見受けられた。「保存」と「継承」の難しさについても、あらためて考えさせられる視察となった。

日 時	2025 年 7 月 15 日（火） 午後 2 時 10 分～午後 3 時 40 分
視 察 先	兵庫県神戸市
調査項目	阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
調査内容	本市においてもいつ発生するか分からない地震災害について見識を深め、市の防災対策及び防災意識の向上に資することを目的として、阪神・淡路大震災を記念して設立された本センターを視察した。 本年は、阪神・淡路大震災から 30 周年を迎え、震災 30 年関連イベントが開催されている。視察日には、人と防災未来センター特別展示が開催されており、特撮映像を使った再現映像の撮影現場や関係者の思いなどが様々な展示方法によって特別展示されていた。特に、映像による展示では、津波災害を意識した避難行動を喚起する内容となっており、阪神・淡路大震災以後に発災した東日本大震災、また、発生が懸念されている南海トラフ巨大地震を想定した「防災意識の向上」に繋がる内容でもあった。
所 感	阪神・淡路大震災の発生から 30 年の節目に当たり、震災自体の「風化」が懸念されている。発災後、「創造的復興」の名のもとに、大掛かりな復興プロジェクトが進み、視察先のセンター周辺も近代的な施設が林立している。被災状況に関する展示を見た後に、この神戸の街に目をやると、今、この時勢下において同様の災害が発生した場合、ここまで復興がなし得たのかと想像せざるを得なかった。 また、この 30 年という月日の長さから、「風化」という問題を考えざるを得なかった。センターでは学生や若者など「震災を知らない世代」を巻き込んだ各種プロジェクトが展開されている。南海トラフ巨大地震の発生リスクが高まり、地震以外の自然災害も頻発する昨今において、過去の震災、災害の「伝承」が大きなテーマになると感じた。 本市においても、今年は北但大震災 100 年の大きな節目を迎える。自らが住まう地域の過去の災害から学ぶべき知見は多い。行政、住民が「地域防災力向上」の共通の目標、意識を持って、防災・減災に取り組むことが重要であると考える。本視察で得た知見と所感を持って、当委員会での今後の調査活動に活かしてゆきたい。